

関東・東北豪雨からの復興

下妻市ふるさと博物館

平成27年9月10日、関東・東北豪雨と名付けられた集中豪雨が下妻市をも襲いました。

当館にも溢水した鬼怒川の濁流が駐車場に押し寄せ、午前11時、我々職員も間一髪で脱出したのですが、その時は本館の床上までの浸水は想像していませんでした。ただ、その後様子を見にきた時、増え続ける水を見て、「もしかすると」という不安を抱きました。

翌日、出勤すると水は引いていました。祈るような気持ちで扉を開けると、はたして床上30cmまで浸水した痕跡が見えたのです。

その後は溜まった汚水のかき出し、被災した書類や物品の片付け、廃棄です。当館の職員4人ではとても間にあいません。しかし、大変有難いことに、多くの方々から作業のご協力を頂くことができました。市の職員はもとより、下妻中学校の先生方と生徒、下妻二高野球部の生徒達、当博物館に関わりの深い団体の皆様等。連日、100名を超える方々の協力のもと、作業を推進しました。

被災物の廃棄や消毒等、喫緊の作業は2か月程で目途がついたのですが、再開のためには大規模な改修工事が残されています。幸い、市の迅速な対応で予算、改修業者の選定等スムーズに進んだのですが、特殊な施設のため、困難を極める作業や被災資料の補修など、時間を必要とする工程も多く、すべての作業が終了したのは翌28年の9月末でした。

改修工事終了後、再オープンを目指して11月3日とし、企画展を実施することにしました。内容は、本年度が開館20周年に当たること、また、災害からの復興をアピールするという趣旨を取り入れ、最終的に、下妻市が生んだ彫刻家で日本芸術院会員の故市村緑郎氏の作品展に決定し、会期中入館料は無料としました。本市に寄贈された76点の作品うちの42点と市村緑郎夫人から借用したデッサンやレリーフを展示し、11月2日に関係者を招待しての内覧会を実施、そして11月3日、約1年2か月ぶりに再オープンすることができたのです。

11月3日から12月11日までの企画展開催期間中1,336人の入館者を数え、特に11月12日、市村夫人と補修を依頼した彫刻家の清家悟氏を招いてのギャラリートークでは、県内外から約200人の来場者がありました。

まさかと思った被災体験。今、思うことは多くの方々のご協力に対する感謝です。今後とも多くの方々楽しんでいただける博物館を運営していくことこそ自分の使命だと感じています。それが、当館が賜った多くの善意に対する恩返しと考えています。

(横堀孝徳)



下妻二高野球部員による復旧作業 (H27.9.12)



『市村緑郎展』における清家悟氏のギャラリートーク (H28.11.12)

●目次

下妻市ふるさと博物館	1
平成28年度研修会報告	2.3
館・展示紹介 常陽史料館	4
館・展示紹介 小美玉市玉里史料館	5
会長コラム 茨城県博物館協会会長 金子賢治	6
茨城県博物館協会加盟館・園一覧	7
随想 日鉦記念館	8
産業技術総合研究所地質標本館	8

平成28年度 茨城県博物館協会研修会報告

今年度の研修会は、2017年2月2日(木)茨城県陶芸美術館を会場として開催いたしました。概要及び内容は以下のとおりです。

1 研修会概要

(1) 意見交換

各館の取り組み状況及び課題等について

(2) 講演

「日本美術の伝え方 『翻訳者』としての仕事」

講師：橋本麻里 氏

ライター・エディター

公益財団法人永青文庫 副館長

2 内容についての報告

(1) 意見交換

昨年度開催した研修会の参加者アンケートに意見交換を希望する回答があり、今年度実施をした。事前に各館の取り組み状況及び課題等について提出していただき、その回答を元に意見交換を行った。

①地域との連携について

- ・館職員、市民団体(主に退職された教員等)による講座を定期的に実施。
- ・小学校の校外学習の際に解説案内(資料に実際に触れる等)。
- ・近隣施設との連携(お互いに楽しく学べる施設をPR、職員が行き来しガイドをする等)。
- ・市の方針(市民共同のまちづくり、子育て世代に優しいまちづくり)に合わせて、子育て世代の主婦を中心としたNPO法人へ管理運営(受付業務等)を委託。

②ボランティアについて

- ・ボランティア募集の際には、条件を設定(県内在住在勤、年齢、月の活動時間等)
- ・ボランティア保険(往復の交通事故、活動内の事故等について補償)に加入。
- ・班に分けての活動、代表者に連絡をとり、活動日程等を調整。
- ・ボランティアの高齢化に伴い、交通事故等の危険性がある。
- ・少子高齢化に伴い、地域活性化を含めて定年退職者の活躍の場をつくる。
 - 子どもたちと話すことでコミュニティの場にもなる。
 - お願いするだけでなく、自分たちが考えて自分たちで行動できるよう自主的に活動できる場。

③誘客促進、民間会社との連携

- ・チラシポスターや割引券を市内のホテルへ配布。
- ・タクシー協会と連携
 - タクシーの車内にチラシ及び割引券を設置。
- ・公共交通機関との連携
 - 鉄道と関連したPR、鉄道を利用した遠足を計画等。

④予算確保について

- ・行政の博物館に対する認識度が低く、予算も維持管理程度に抑えられてしまうため、行政の意識改革、地域住民の意識向上に取り組んだ。
- ・市役所職員にも博物館で行っていることを理解してもらうため、庁内にも積極的にPRをした。
- ・地域住民からの愛着度がバロメーターになり、予算確保につながると思う。
- ・(県や市町村の)基本計画や総合計画にリンクさせることで予算化できる可能性が高い。

⑤その他

- ・メディアで取り上げられるには、日ごろから記者と顔をつ

ないでおく(メール等で展覧会の情報を提供するなど連絡を密にする)。

- ・視覚に訴えるポスターやチラシのインパクト、意外性も重要。
- ・過去に新聞社企画で県内の各館の作品解説等の連載があり、反響があったので、またそのようなことができるといい。

(2) 講演会

橋本氏はライター・エディターとして『BRUTUS』、『和楽』、『芸術新潮』などの編集、記事の執筆を手がけられている。その一方で永青文庫の副館長も務められている。日本美術を主な領域としているが、美術だけではなく、他分野にも精通しており、ツイッターのフォロワー数は約5万5千人と人気である。講演では美術の面白さや興味深さを伝えていくために翻訳者としてどのように切り口をつくっているか等のお話をいただいた。

①日本美術ブームについて

日本美術ブームとは何が原因で起こっているのか。

必ずしもいいこととは言えないが、長引く不況の中で育ったある内向きの感覚、あるいは一歩間違えると、危険なナショナルリズムの方にも簡単に裏返ってしまうような、日本に対する関心・愛着のようなものが、日本美術ブームの導火線になっているという感覚がある。その結果、今まではどちらかというと印象派や西洋の名画等に関心が集まりがちであった美術の特別展で、日本美術がテーマとなったものに人が集まるようになったのではないかと。

もうひとつ、現代美術の分野に出現している、古典的な日本美術をリスペクトし、引用する日本の作家たちが、世界で活躍していることもあり、その流れが逆輸入的に日本に入ってきて、日本美術の再評価につながっている。

伊藤若冲ブームを例にとると、伊藤若冲が好評を得た一つの理由に、『見ればわかる』ことがある。それまでの美術に顕著だった、それが属する文脈や背景を理解しなければ良さが伝わりにくい作品とは違い、西洋化または近代化された日本美術から切り離された文化の中で育ってきた人たちであっても、ひと目見れば自分が好きか嫌い、良いか悪いかを判断できる。

良い・悪いを判断するための一つの要素が、『テクニク』だと思う。若冲の精緻な彩色画は、そのディテールや、モチーフの背景にある仏教思想についての知識がなくとも、「すごい」とは評価できる。特に技術の高度さに対する評価は、その技術文化や背景等を知らなくても言える。

また、メディアで取り上げられ(宇多田ヒカルPV、サントリー商品パッケージ等)、一般の人の目にも触れる機会が増え、話題になり集客につながった。

問題なのは、何時間並んだ・何十万人入ったということがニュースになることで、並んでいるものが何なのかではなく、並んでいるから行くという人をも惹きつけた。

現在の美術館・博物館を評価するための基準が入場者数しかなく、それだけでしか評価されないのが大きな問題である。入場者数だけが評価の基準になってしまうと見えなくなるものが多い。入場者数以外の評価基準を何か確立することができないか。そして、現在のような「展覧会開催期間中に何時間並んだ」というニュースとは違う形で一般の人に伝わり、それをきっかけとして足を運んでもらえるようにならないだろうか。

2015年にNHKのニュースウェブに出演していた時に、報道の中にいて分かったが、美術に関してあまり知識がない人



意見交換の様子

でもその価値を判断できる、定量的な話題がニュースとして選ばれる(『新発見・初公開・何億円で落札・これで見納め・入場者数何十万人・何時間待ちの行列』等)。その展覧会の内容がいかにオリジナリティがあったかということではなく、入場者数何十万人という数値がニュースになる。ニュースを発信する側が、数値で評価できる部分でしか判断できない。

プレスリリースを出す際に、芸術文化や自然科学のことをあまり知らない、あるいは美術館・博物館にあまり足を運んだことがない人にもわかるような(『どこが素晴らしいのか、面白さがどこにあるのか』が伝わるような)切り口を意識してリリースを書いていただきたい。なかなか伝わらずにニュースとして取り上げられるのは、定量的な数値で判断できるものしかないということを感じた。

各館ではSNS等で情報を発信していると思うが、フォロワーが増えない、リツイートされないなどの館は、太田記念美術館と国立公文書館のツイッターを参考にしてほしい。

太田記念美術館は浮世絵専門の美術館で館の職員も少ないが、フォロワーが約9万人。自館の情報だけではなく、開催中の展覧会に関連する他館の情報も積極的に発信したり、ギャラリートークで話すような内容を数回に分けて連続的に投稿したり発信が上手い。

国立公文書館は約3万5千人のフォロワー。たとえばブラタモリや大河ドラマで放送される内容に合わせ、視聴者が関心を持ちそうな文書や歴史資料など画像を有効に使い、切れ目なく一日に2、3件の投稿を行っている。この2館は情報発信が上手いのでぜひ参考にしていただきたい。

②メディアでいかに美術の面白さを伝えるには

○わかりやすい斬新な切り口

・どんなテーマ性を持たせるかを工夫する。『芸術新潮』(新潮社)では、それまで年配男性向けだった『春画』テーマに、女性向けの特集を作った。月刊女性誌やカルチャー誌でよく見られる見出し「恋する○○」を引用し、書店で最初に目にする表紙とタイトルを女性にも手に取りやすく工夫した→恋する春画

・『BRUTUS』(マガジンハウス)では、流行や目新しいものに価値を置き、都市で消費生活を楽しむ読者層に日本美術をどう魅力的に見せるかが問題だった。日本美術と現代アートを融合させた特集として、古典的な日本の絵画、彫刻作品と現代美術作家たちの作品を対比しながら、ページを構成した。

・出版不況の現在は、メディア自身がテーマを設定して、美術の特集を組むことが難しくなっている。雑誌では、展覧会にあわせて特集を組むことによって(展覧会の広報になるため)、写真の掲載料がかからないことがメリットになっている。写真の貸出料・掲載料がメディアにとってはハードルになっている。

・浮世絵=メディア。浮世絵は現在の雑誌メディアと同じだったという視点で特集。現代に実在する情報誌の誌面等も掲載し、江戸時代の浮世絵のあり方が現在の情報誌などに似ているということを、現代の読者にわかりやすく紹介した。

・常設展示の重要さ

特別展も大事だが常設展も大事。常設展の底力をみせるような特集として、『BRUTUS』では「日本美術総まとめ」を企画。東京国立博物館の常設展示では、縄文時代から江戸時代までの日本美術の通史を、絵画・書・彫刻・工芸の全ジャンルによって展開している。その展示を編集しながら、誌面に展開。全体として東博特集となっていることから、東博の広報も兼ねる、というコンセプトで、画像使用料を無料にもらった。

・切り口だけではなく特集の内容をどうつくるか。

『BRUTUS』での仏像特集では、仏像の尊格の区別がつか

ない初心者にも楽しんでもらうため、日本史の中に仏教・仏像を置き直した。日本美術史=仏教美術史といってもいい様相を呈しているのが、時代ごとの政治経済、宗教的な状況が同時に作品に反映している。仏像の知識がない人でも、学校で学んできた歴史が漠然と頭に入っているのが、日本の歴史と組み合わせる形で、仏教・仏像の変遷を紹介した。

○広角レンズを使うか顕微鏡を使うか

作品に近寄って、顕微鏡的に細部を拡大して見せるか、カメラを引いて大きな画面(広角レンズ)の中に作品を置き、その時代の政治・経済・宗教など様々な文脈から作品が生み出されたことを見てもらうか。

作品だけではなく、作品制作の当時の社会状況や時代背景=大きな物語と一緒に見られると、自分の中に既にある知識と結び付けられる。

なるべくたくさんさんの文脈を示し、かつなるべく広い画角の中に作品を置いてみせる。

○効果的な対比や比喩

編集執筆を担当した日本文教出版の高校美術の教科書では、アートの始まりを表現するため、最初のページにiPhoneと石器の写真と並べて掲載した。最初の人工物(人によって道具として作られたもの)が石器。道具としての機能を越えた『凝り』を、人工物に与えるようになるのがホモサピエンスたち。人が生きていくための道具から見て感じるための人工物へ、変化が起こっていく。わかりやすい例が石器。人類にとって、アートと言える最も根源的な要素は、恐らく平滑性と左右対称性であるというのが、現在の認知考古学者たちの知見である。そして現在私たちが使っているiPhoneも、石器と並べて置いたとき、平滑性と左右対称性を有し、かつ美しいデザインとして受け入れられている。数万年の時間を経ているが、人が作り出す人工物とは何か、アート(見て感じるためのもの)とは何か、人間とは何かを考えると、美術教科書の冒頭に掲載することには意味があるのではないかと考えた。このような対比が美術というものを考える際に新しい視点を与えるというメディアの手法である。

○意外性のある補助線

自然科学、人文科学をまたぐような補助線の引き方があると思っている。

博物学が世界中で勃興した18世紀、記録としての博物図譜が描かれる一方、同時代の喜多川歌麿や伊藤若冲のような絵師たちもまた、動植物や昆虫の精緻な絵画を描いている。こうした補助線を引くことで、普段は交わらない自然科学系の博物館と人文科学系の美術館が協働していく可能性もあるのではないか。

○点から線、そして面へ：地図をつくる

各地で開催されている展覧会に足を運んでもらった経験が、断片的な知識のままであっては発展性がない。それぞれの展覧会や、そこに展示されていた展示物が、また別の展覧会での経験や知識と有機的に結びつけられることで、点と点の間に線が引かれ、線が幾重にも交錯していくことで、面=地図ができる。

たとえばiPhoneと石器を結ぶ線、若冲と平賀源内の博物図譜を結ぶ線。その人なりの興味関心に従い、たとえば美術とデザイン、人文科学と自然科学をまたぎながら線が交錯していくことで、ただ「面白かった」で終わらない、自分自身のオリジナルな視点、作品や作家を位置づける地図ができていく。自分がメディアを通じて活動する際は、そのような鑑賞へ導けるような紹介の仕方を考えている。



「常陽史料館」は、常陽銀行の創立60周年記念事業の一環として1995年7月に開館しました。郷土の歴史や芸術・文化、金融経済に関する資料を収集し、それらを広く一般に公開することを目的として活動しています。貨幣や茨城の金融史を体系的に紹介する貨幣ギャラリーのほか、約3万3千冊の蔵書を閲覧できる史料ライブラリー、出身または活動拠点が茨城県の芸術家、あるいは伝統工芸品など地域の草の根的な展示を行うアートスポットの三つの公開施設を備えています。

2階の史料ライブラリーでは横山大観や野口雨情ら郷土ゆかりの画家、文学者らの作品集(図書)を始め、水戸学関係図書、各市町村史など茨城県の歴史と文化に関わる文献のほか、金融・経済史、各企業の社史に至るまで多彩な蔵書を収集・公開しています。また、ご要望に応じて最適な資料を紹介するレファレンスサービスも実施しています。

地下1階にある貨幣ギャラリーでは、紀元前から現在までの貨幣の変遷を時代を追って紹介しています。紀元前の中国で使われたという魚や刀の形をした珍しい貨幣や、「和同開珎」をはじめとする「皇朝十二銭」や渡来銭、江戸時代の大判、小判、水戸藩で造られた貨幣など、現在までに国内で流通した貨幣約360種の実物展示が見どころ。ギャラリーの一角には、現在の銀行の前身と言われる両替商の店頭の様子が実物大で再現され、机上に配された算盤や天秤はかりなどが往時をしのばせます。

また、地域金融の歩みとして茨城県に四行の国立銀行が設立された明治時代から現在に至るまでの郷土の金融の歴史を実物の資料や解説パネルと共にわかりやすく紹介しています。一例として常陽銀行のルーツの一つである第六十二国立銀行の発起人が明治政府に提出した銀行創立願やその時々を通帳、金融商品の広告などの資料も多数展示しており、現在の銀行と比較することもできます。

実物の百倍に拡大した1万円札で、日銀券の偽造防

止技術を紹介するコーナーや、江戸時代の千両箱と現在の1億円の重さを体感できるコーナーも設置。子どもから大人まで幅広い年齢層が関心を持てる体験コーナーになっています。

さらに、学生向けの金融教室も随時開催。貨幣ギャラリーの見学に加え、お金のはなし、銀行の歴史や役割をテーマにした講義を行い、若い世代が金融に関心を抱く一助となるよう金融教育の場を提供しています。



史料ライブラリー



貨幣ギャラリー

場 所：〒310-0024 茨城県水戸市備前町6-71

電 話：029-228-1781

開館時間：10:00～17:45(貨幣ギャラリーは17:00まで)

休 館 日：毎週月曜日、年末年始(12/29～1/4)

8月第2日曜日とその翌々日の火曜日、12月第1日曜日

見学時間：約1時間

料 金：無料

企画展開催期間：

「時に棲む彩 藤原ゆみこ展」(29.4.4～29.5.21)

「スクリーンの仲間たち」大下武夫作品より(29.5.30～29.7.16)

「コッペ DE みみちゃんえほんクラフト展」(29.7.25～29.9.17)

「鍛金 友常みゆき展」(29.9.26～29.11.19)

「高橋協子 民話の世界展」(29.11.28～30.1.21)

「ミシンキルト 長谷川幸子展」(30.1.30～30.3.25)

※ 展示の内容が一部変更になることもございます。

交通アクセス：JR水戸駅北口より大工町方面行きバスで泉町1丁目下車徒歩約7分

URL：http://www.joyogeibun.or.jp/siryokan/index.html



外観



小美玉市玉里史料館は、「豊かな海(霞ヶ浦)と大地に住む」をメインテーマに掲げ、玉里地区の歴史を旧石器時代から近・現代にわたって展示する施設として、平成6年(1994)に玉里村立史料館(当時)として開館しました。平成18年に現在の館名となり、史資料の管理や展示会開催だけでなく、市内の埋蔵文化財保護事業の中核機関としても機能しています。

展示室に入ってすぐ右手には、縄文時代のコーナーがあります。ここでは、部室貝塚から出土した土器、貝殻および獣骨などが展示されています。縄文時代の霞ヶ浦は穏やかな内海であり、海の幸、山の幸に恵まれた当時の人々の生活を垣間見ることができます。

展示室左奥には、大きな円筒埴輪が目をひきます。これは舟塚古墳出土のもので、県指定文化財に指定されています。玉里に所在する古墳から出土した直刀や金環、勾玉なども併せて展示されており、古墳時代天然の良港だった高浜入りを中心に、水上交通を掌握した有力豪族の存在が想像できます。

中世のコーナーには、玉里地区内に所在する大宮神社の鰐口が展示されています。この鰐口は県指定文化財に指定されており、正嘉元年(1257)の銘があります。

江戸時代のコーナーでは、玉里御留川や水運に関する展示がみられます。このうち、玉里御留川とは、水戸藩の直轄の漁業地のことを指し、高浜入りの一部が対象地となりました。また、展示ケース内の壁には、霞ヶ浦全体を描いた絵図の写真が掲げられています。これは、網引きの場所をはじめ、霞ヶ浦周辺の地名や高瀬船、神社などを描いたもので、当時の霞ヶ浦の全体を眺観できるものとして大変貴重です。

史料館では、常設展のほかに年3回程度市内の文化財や歴史に関係した企画展・参考展や歴史探訪講座や講演会などの関連事業を開催しています。

また、周辺には史料館の附属施設として、江戸時代中期頃に建築された萱葺き屋根の「小美玉市民家園」(市指定文化財)や、全長約90mで市内最大級の前方後円墳である「権現山古墳」などがあり、史料館とともに文化財を身近に親しめる場所として整備されています。

今後も多くの方に市内の歴史や文化財の魅力を伝える史料館であるよう、努めてまいりたいと思います。



舟塚古墳出土円筒埴輪
(茨城県指定文化財・
県立歴史館蔵)



部室貝塚出土品を展示

場 所：茨城県小美玉市高崎291-3

電 話：0299-26-9111

開館時間：9:30～18:00

休 館 日：月曜日・祝日(月曜日が祝日の場合は翌日も)・年末年始(12/28～1/4)

料 金：無料

交通アクセス：JR常磐線高浜駅より関東鉄道バス銚田行き松山停留所下車徒歩約10分
車…常磐自動車道千代田石岡ICより水戸市方面約20分

博物館ホームページ：<http://cosmos.city.omitama.lg.jp>



展示室入口



会長コラム

陶芸に関わる芸術論―笠間陶芸大学学校の初めての卒業生に伝えたこと



金子賢治
(茨城県博物館協会会長)

昨年四月、茨城県立笠間陶芸大学学校が開校した。陶芸美術館のすぐ隣あった県立窯業指導所が名称を変え、新たに発足したものである。名称を変えてと言ったのは、もともと窯業指導所は、陶磁器を制作する施設として日本でも超一流の設備を備えていたもので、名称変更だけで、十分陶芸学校としての機能を発揮することができたからである。ただ、ロクロの台数を増やすとか、やや古くなった窯の更新、埃を嫌う磁器や鋳込み制作室の新設など、若干の手直しは行われた。

その大学学校が、この3月3日に初めての卒業式を迎えた。かく言う私も初めて学校長などという大役を拝命し、まさにピッカピカ(かなりくたびれてはいるが)の一年生である。卒業式は勿論のこと、式辞というのも初めて。一体何を伝えるべきか、大いに悩んだのである。

「ああでもない」「こうでもない」といろいろ悩んで、言葉の受け手側ならどう思うのかなどとと思っているうちに、「自分の入学、卒業の時ってどんなだったろう?」という思いに至り、いつのまにやら久しぶりに昔のことを思い出していた。

私の大学入学は1969年、東京のいわゆる「学生運動」(正確には暴力学生集団の暴挙)が潰され、地方へ移って行った時期で、私もそれと共に地方の大学に入ったのである。案の定、入学式は学生の乱入で中止。世の中は、安保自動延長、よど号ハイジャック事件、70年万博、三島由紀夫割腹事件、沖縄返還、あさま山荘事件など、目が回るほど次々と大きな出来事が起きた、文字通り激動の時代であった。

それを反映して、学内でもいろいろな出来事が起き、多くの例にもれず、建物封鎖、機動隊導入、機動隊監視下での試験実施という事態となった。これに怒り、全学的な試験ボイコットが起き、約八割が留年し、私の友人でも自主退学、あるいは除籍(単位不取得)などになった者が出たり、異常な時代であった。

私の専攻は美学美術史で、そういう事態を目の当たりにして、当然のことながら、「美術とは何か、芸術とは何か、どうあるべきか」ということを考えざるを得なかったのである。東日本大震災の際に制作者が「こんなときに作品なんか作っていいのか?」という自問を発したのとよく似ている。

そういう中で、学生新聞や他の媒体で芸術論、美術評論の真似事みたいなことを始めていった。そして徐々に徐々に、少しずつ一つの思いに至る。それは、美術・芸術は政治・経済など他のこととは別だ、学生の運動が激しければ激しいほど別物だ、という思い、ないし確信であった。

では何が別物なのか?それは「形」である。いくら政治的に怒りを覚えても、貧しく虐げられた人たちに心を寄せても、それが即芸術化、美術表現化することはない。そうした感情、感性が落ち着いて、それらを意識した自分を見る目ができてこないうちは表現にはならない。つまり自分を見つめる自分の目ができてこないうちは表現は成立し得ないのである。

例えば、悲しみの中にいるうちは悲しみの表現はできない。悲しみを対象化してこそできる。言い換えると悲しみを表現し得たということは悲しみを抜け出したということでもある。そうして出来てくるのが「形」である。この「形」が政治や経済、他のすべてと美術・芸術を区別している。「形」と言ってもそれは単に立体のみを意味するのではない。平面の形、音楽におけるサウンドの造形、文学の描く言葉の造形、すべてが含まれる。

そして陶芸とは、頭の中や図面で描かれた自分の「形」を「土から陶へ」というプロセスに置き換えていくものである。その際に、造形素材としての土の性質にいろいろな制約を受ける。その手作りの「形」は全く個人に属するもので、色や模様と性格を全く異にする。色や模様なら工業デザインでもいかようにでもできる。手作りの「形」はデザインではできない。つまり「表現は形に宿る」のである。

卒業したとたん、なんでもあった学校とは違い、何も無い作家生活に落とされる。しかし何かあるたびにそれを思い起こせば何も怖いものはない。俗に、卒業後十年経つと一割しか作家の世界に残っていない、と言われる。しかし陶芸に関わる以上、その信念さえあれば十割残るのも不可能ではない。それを卒業式の式辞とした。

平成28年度事業報告

- 理事会 平成28年6月8日(水) 茨城県陶芸美術館
○平成27年度事業報告及び決算報告について ○平成28年度事業計画(案)及び予算(案)について
- 総会 平成28年6月8日(水) 茨城県陶芸美術館
○平成27年度事業報告及び決算報告について ○平成28年度事業計画(案)及び予算(案)について
- 研修会 平成29年2月2日(木) 茨城県陶芸美術館
○意見交換 各館の取り組み状況及び課題等について
○講演 「日本美術の伝え方『翻訳者』としての仕事」
講師 橋本麻里氏
ライター・エディター
公益財団法人 永青文庫 副館長
- 出版 「いばらきの博物館2016」発行 平成28年8月
「茨城県博物館協会 NEWS No.42」発行 平成29年3月
- ホームページ運営 <http://ibaraki-museums.jp/>

茨城県博物館協会加盟館・園一覧

(2017.1.現在)

No.	館 園 名	郵便番号	住 所	電話番号
1	北茨城市歴史民俗資料館 野口雨情記念館	319-1541	北茨城市磯原町磯原 130-1	0293-43-4160
2	茨城県天心記念五浦美術館	319-1703	北茨城市大津町椿 2083	0293-46-5311
3	高萩市歴史民俗資料館	318-0034	高萩市高萩 8-1	0293-23-7229
4	日立市郷土博物館	317-0055	日立市宮田町 5-2-22	0294-23-3231
5	日鉦記念館	317-0055	日立市宮田町 3585	0294-21-8411
6	日立市かみね動物園	317-0055	日立市宮田町 5-2-22	0294-22-5586
7	常陸太田市郷土資料館	313-0055	常陸太田市西二町 2186	0294-72-3201
8	和紙人形美術館 山岡草常設館	319-3543	久慈郡大子町左貫 1920	02957-8-0511
9	西ノ内和紙のさと資料館	319-3107	常陸大宮市舟生 90	0295-57-2252
10	常陸大宮市歴史民俗資料館大宮館・山方館	319-2265 319-3111	(大宮館) 常陸大宮市中富町 1087-14 (山方館) 常陸大宮市山方 969-2	0295-52-1450 0295-57-2616
11	那珂市歴史民俗資料館	311-0121	那珂市戸崎 428-2	029-297-0080
12	原子力科学館	319-1112	那珂郡東海村村松 225-2	029-282-3111
13	ひたちなか市埋蔵文化財調査センター	312-0011	ひたちなか市中根 3499	029-276-8311
14	アクアワールド茨城県大洗水族館	311-1301	東茨城郡大洗町磯浜町 8252-3	029-267-5151
15	大洗海洋博物館	311-1301	東茨城郡大洗町磯浜町 6890	029-266-1444
16	大洗町幕末と明治の博物館	311-1301	東茨城郡大洗町磯浜町 8231	029-267-2276
17	願入寺開基堂(資料館)	311-1301	東茨城郡大洗町磯浜町 7920	029-266-2334
18	大洗美術館	311-1301	東茨城郡大洗町磯浜町 8249	029-266-2637
19	偕楽園好文亭・特別史跡旧弘道館	310-0033	水戸市見川1丁目1251(茨城県水戸土木事務所偕楽園公園課)	029-244-5454
20	常磐神社 義烈館	310-0033	水戸市常磐町 1-3-1	029-221-0748
21	徳川ミュージアム・西山御殿(分館)	310-0912	水戸市見川 1-1215-1(徳川ミュージアム)	029-241-2721
22	茨城県近代美術館	310-0851	水戸市千波町東久保 666-1	029-243-5111
23	茨城県立歴史館	310-0034	水戸市緑町 2-1-15	029-225-4425
24	水戸市立博物館	310-0062	水戸市大町 3-3-20	029-226-6521
25	(公財)常陽藝文センター	310-0011	水戸市三の丸 1-5-18	029-231-6611
26	水戸芸術館 現代美術センター	310-0063	水戸市五軒町 1-6-8	029-227-8111
27	常陽史料館	310-0024	水戸市備前町 6-71	029-228-1781
28	常磐大学 博物館学博物館	310-8585	水戸市見和 1-430-1(常磐大学キャンパス内)	029-232-2511
29	笠間市立歴史民俗資料館	309-1722	笠間市平町 29	0296-77-8925
30	(公財)日動美術財団 笠間日動美術館	309-1611	笠間市笠間 978-4	0296-72-2160
31	笠間稲荷美術館	309-1611	笠間市笠間 1	0296-73-0001
32	田中嘉三記念館	309-1626	笠間市下市毛向山 1377-2(芸術村)	0296-72-3309
33	茨城県陶芸美術館	309-1611	笠間市笠間 2345(笠間芸術の森公園内)	0296-70-0011
34	ひょうたん美術館	319-0107	小美玉市小岩戸 1677	0299-48-4088
35	小美玉市玉里史料館	311-3433	小美玉市高崎 291-3	0299-26-9111
36	小美玉市小川図書館・資料館	311-3423	小美玉市小川 1664-2	0299-58-5828
37	長勝寺 宝物陳列室	311-2424	潮来市潮来 428	0299-62-3808
38	鹿島神宮宝物館	314-0031	鹿嶋市宮中 2306-1	0299-82-1209
39	神栖市歴史民俗資料館	314-0144	神栖市大野原 4-8-5	0299-90-1234
40	かすみがうら市歴史博物館	300-0214	かすみがうら市坂 1029 番地 1	029-896-0017
41	土浦市立博物館	300-0043	土浦市中央 1-15-18	029-824-2928
42	上高津貝塚ふるさと歴史の広場	300-0811	土浦市上高津 1843	029-826-7111
43	つくばエキスポセンター	305-0031	つくば市吾妻 2-9	029-858-1100
44	産業技術総合研究所 地質標本館	305-8567	つくば市東 1-1-1 中央第 7	029-861-3750
45	つくば市谷田部郷土資料館	305-0861	つくば市谷田部 4774-18(谷田部交流センター3階)	029-836-0139
46	茨城県つくば美術館	305-0031	つくば市吾妻 2-8	029-856-3711
47	国土地理院 地図と測量の科学館	305-0811	つくば市北郷 1	029-864-1872
48	つくばみらい市立間宮林蔵記念館	300-2335	つくばみらい市上平柳 64	0297-58-7701
49	龍ヶ崎市歴史民俗資料館	301-0004	龍ヶ崎市馴馬町 2488	0297-64-6227
50	取手市埋蔵文化財センター	302-0007	取手市吉田 383	0297-73-2010
51	利根町立歴史民俗資料館	300-1615	北相馬郡利根町中谷 967	0297-68-4600
52	予科練平和記念館	301-0302	稲敷郡阿見町廻戸 5-1	029-891-3344
53	真壁伝承館歴史資料館	300-4408	桜川市真壁町真壁 198	0296-23-8521
54	月山寺美術館	309-1451	桜川市西小嶋 1677	0296-75-2251
55	岩瀬石彫展覧館	309-1343	桜川市亀岡 741	0296-75-1550
56	下妻市ふるさと博物館	304-0056	下妻市長塚乙 77	0296-44-7111
57	しもだて美術館	308-0031	筑西市丙 372	0296-23-1601
58	本場結城紬染織資料館「手織り」	307-0001	結城市結城 12-2	0296-33-3111
59	八千代町歴史民俗資料館	300-3572	結城郡八千代町菅谷 1017-1	0296-48-0525
60	ミュージアムパーク茨城県自然博物館	306-0622	坂東市大崎 700	0297-38-2000
61	坂東市立資料館(坂東郷土館ミュージズ)	306-0502	坂東市山 2726	0280-88-8700
62	境町歴史民俗資料館	306-0431	猿島郡境町西泉田 1326-1	0280-81-3353
63	古河歴史博物館	306-0033	古河市中央町 3-10-56	0280-22-5211
64	(公財)中田俊男記念財団 牛乳博物館	306-0235	古河市下辺見 1955	0280-32-1111

個人会員

1	海野 修	306-0012	古河市旭町 2-17-27
---	------	----------	---------------

■色は歴史・民俗 ■色は美術 ■色は自然・科学 ■色は産業 ■色は動物
※『いばらきの博物館2016』の館番号に対応しています。

開館30周年並びに来館者40万人を達成

1905年(明治38年)12月、創業者・久原房之助は赤沢銅山を買収し、日立鉱山として開業しました。これがJX金属グループの創業となります。これは、工業都市・日立市の発展の原点であり、また茨城県の近代鉱工業の発祥でもあります。

日立鉱山は、開業間もなく日本を代表する大銅山へと躍進し、以来、1981年(昭和56年)の閉山までの76年間、我が国の近代化と経済産業に寄与してきました。

日鉱記念館は、1985年(昭和60年)の創業80周年を記念し、日立鉱山跡地に建てられました。JX金属グループの歴史的資料・鉱石・鉱山機械等を展示しており、当社グループの歴史は勿論、日立市発展のあゆみや日本の近代産業史をご覧いただけます。

お陰様で、2016年4月には開館30周年を迎えるとともに、同年10月に来館者40万人を達成しました。

日鉱記念館は今後とも、多くの皆様にご見学を頂くとともに、より一層ご理解頂けるよう努めてまいります。
(日鉱記念館)



日鉱記念館

筑波山地域の日本ジオパーク認定を記念して

平成28年9月9日に、つくば市・石岡市・笠間市・桜川市・土浦市・かすみがうら市の6市からなる筑波山地域が日本ジオパークに認定されました。茨城県北ジオパークに次ぐ県内2つめの認定です。産業技術総合研究所地質標本館は、学習施設の1つとして筑波山地域ジオパーク推進協議会に協力しています。このため、この度の認定を記念して10月4日～29日に館内で臨時展示「筑波山地域ジオパークを学ぼう!」を開催しました。筑波山周辺の立体模型に地質図などのプロジェクションマッピングや概要説明のパネル展示を行い、館内の関連展示物の配置図と説明のリーフレットを作製しました。リーフレット片手に館内を回りながら筑波山地域ジオパークの地質的な背景を学んでいただこうという趣旨です。10月16日には筑波山の岩石と周囲の平野の地質に関する講演会を開催しました。岩石の話とともに、平野がなかったら筑波山がどう見えるのかの話題もあり、平野の地下地質についても考えていただくことができました。

今年度、地質標本館では筑波山周辺の地質コーナーを改修しています。今後、他機関とも連携しながら筑波山地域ジオパークの活動に協力していきたいと考えています。



日本ジオパーク認定記念臨時展示

(産業技術総合研究所地質標本館)

編集後記

本紙発行にあたりまして、ご多忙にも関わらず原稿をご執筆いただきました皆様に御礼申し上げます。また、2年間事務局を担当させていただきました、会員の皆様には多大なご協力を賜り感謝申し上げます。研修会等を通して今後も各館相互の交流、連携が深まっていければと存じます。

最後になりましたが、会員の皆様のますますのご活躍を心より祈念いたします。

茨城県博物館協会ニュース
No.42

編集・発行
茨城県博物館協会

〒309-1611
笠間市笠間 2345
茨城県陶芸美術館

TEL 0296-70-0011
FAX 0296-70-0012

印刷 (株)光和印刷